

存 在 文 と 倒 置

岡 本 克 人

(高知大学人文学部仏文研究室)

Les Phrases d'Existence et l'Inversion du Sujet

Katsuto OKAMOTO

は じ め に

フランス語はS + V + O型の言語である。伝統的な文法で基本文型といわれる

1. S + V 2. S + V + A 3. S + V + OD 4. S + V + O I 5. S + V + OD + O I
6. S + V + OD + A

においてもS + Vは首尾一貫してその語順を保っている。これに対してV + Sの語順は主語の倒置(L'inversion du sujet)と呼ばれるが、この名称は大なり小なりこの語順が本来あるべき姿S + Vからへだったものであると感じられていることを示しているようだ。しかしながらフランス語において倒置は決してめずらしくなく、特定の場所、言いまわしに現われるのは周知のごとくである。

たとえばIl y a構文を始めとする一連の存在を示す文はテキスト中にあってかなり多いが、実際のところ、これらの文はV + Sの語順である。本稿においては、談話文法的な立場から、Il y a構文、それに類する非人称構文、自動詞(及び自動詞化した代名動詞)を用いた一般に倒置とみなされている構文が、実は基本的語順(L + V + S)を有していて、それ自体で独自の一群をなすものと考えた方が自然でないかという仮説を提出する。

I .

まずフランス語の存在文の構造を見てみよう。存在文とは基本的には「不特定な事物の有無多少を表わす文」(久野)⁽¹⁾ということが出来る。これは平たく言えば「どこそこに何々がある。」と、何かの存在を示す文である。フランス語において典型的・代表的なものはIl y aを用いた構文である。いくつか例を挙げてみよう。

- (1) Il y a un livre sur la table.
- (2) Il y a beaucoup de monde.
- (3) Il y a beaucoup de fourmis dans ce trou.
- (4) Il doit y avoir quelque chose.
- (5) Il y en a quelques exemples.
- (6) Il y a eu un accident au croisement.
- (7) Il n'y a plus d'argent à la maison.
- (8) Il n'y a pas grand-chose à manger dans ce restaurant.
- (9) Il n'y a personne qui sache parler allemand.

- (10) Il n'y avait dans la salle aucun de mes collègues.
 (11) Il y avait une centaine d'étrangers dont trente Français.
 (12) Il n'y a pas de fumée sans feu.
 (13) Il y a une unité latine, mais elle n'est pas évidente au premier coup d'œil.

(MEILLET, p. 310)

- (14) Il y a parenté entre eux.

Il y a 構文は、以上のように、具体的な物から抽象的なものまで様々な存在について用いられ、フランス語にあって、少しもめずらしい文ではない。

ところで Il y a 構文は、非人称の il が用いられていて、真の主語は後方にあり、明らかに V + S の語順である。これはフランス語の平叙文全体を統括する S + V の語順に反する。反するからこそ仮の S (= Il) を文頭に配置したのであろうが、問題はなぜ Il を立ててまで V + S の語順にしなければならないのかということである。さらにまたフランス語では統辞上の諸単位の関係に敏感で、代名詞は厳密に用いられるが、純粹の中性代名詞と見た場合は Il y a 構文の y は何を指しているのか、はっきりしない、という問題もある。

- (15) a. Il y a un livre sur la table.

が S + V が倒置して出来ている文だと仮定しよう。そうすると S + V の形に戻すことが可能なはずである。avoir は用いることが出来ないので être を用いると、

- (15) b. *Un livre est sur la table.

となるが、この文は非文である。

又、主語を特定のものに変え、

- (16) a. Ce livre est sur la table.

という文法的な文を逆に Il y a 構文にすると、

- (16) b. *Il y a ce livre sur la table.

と、非文になってしまう。

- (1) から (14) の文はすべて不特定なものが S になっている。

- (15)b. (16)b. の制限は何に由来するのだろうか。

フランス語では次のように述部が恒常の状態を表わしていると、不定名詞が主語になり得ない。⁽²⁾

- (17) *Un jeune homme est étudiant.

- (18) *Un livre est très intéressant.

- (19) *Plusieurs jeunes filles sont jolies.

(17) (18) (19) は泉による⁽³⁾

- (15)b. の制限は、このことと関係しているように思う。

また (16)b. の制限は、ce livre と言うからには、Il y a un livre. ということが前提となっているはずで、その論理的矛盾の中にある。

こうして見てみると Il y a 構文は S + V を倒置させたものと考えより、V + S をその基本的な構造として独自に有しているとみなす方が自然ではないと思われるのである。

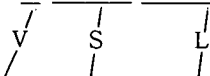
この考え方は、久野氏によって示されたもので、主に日本語、英語の存在文の語順の解明に、フランス語の (15) (16) も証拠の一つに用いられている⁽⁵⁾。

久野氏によれば S + O + V 型の言語 (日本語) は、L + S + V の語順、S + V + O 型の言語 (英語等) は L + V + S の語順が存在文の基本語順である⁽⁴⁾。(L は場所辞を表わす。)

久野氏は主として文中の二つの数量詞の解釈を手がかりに英語の There 構文を S + V + L から派生したものではなく L + V + S の基本語順をもつものであることを証明する⁽⁵⁾のであるが、

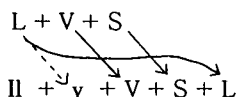
英・仏・西語等で、表層文では、つまり実際には、Lが文末にくることを「『表層文の基本パターンは、主語で始まる』という強い構造的制約を持っているからだ⁽⁶⁾」と考える。

(20) a. There is a book on the table.



(20) b. Il y a un livre sur la table.

英語の there は主語的な機能をもつものらしい⁽⁷⁾。フランス語の Il はまぎれもない主語である。したがってフランス語の場合、Sの充当詞として立った Il がLをSの後へ追いやったと考えられる。y は場所辞移動後のコピーであろう。この過程を図示すると、次のようになる。



II. (i)

Il y a 構文の他に存在文と考えられる一群の非人称構文がある⁽⁸⁾。これらは Il y a〜ほど多く現われないが、明らかに、その構造、機能ともに、Il y a〜と酷似している。

〔存在〕

- (1) Il est des hommes qui pensent autrement.
- (2) Il n'est rien d'aussi beau.
- (3) Il était une fois un bon roi et une bonne reine.
- (4) Au bout d'une distance indéterminée, il se trouvait toujours une place confuse où expirait son rêve. (BOVARY, p. 343)
- (5) (...) il existe des principes dominants en morphologie aussi bien qu'en phonétique. (MEILLET, p. 50)
- (6) (...) il existe bien des sortes de gutturales, et bien des sortes de dentales ; (MEILLET, p. 51)
- (7) Depuis qu'il existe une grammaire comparée systématique, (...) (MEILLET, p. 131)
- (8) Il n'existe pas de beauté absolue.

〔発生〕

- (9) Chaque jour, il arrive beaucoup d'accidents.
- (10) Il n'est arrivé rien de grave.
- (11) Il arrive deux garçons.
- (12) Il leur est arrivé un accident étrange.
- (13) Il vient une idée aux enfants.
- (14) Il est venu trois personnes.
- (15) Il est venu beaucoup de monde.
- (16) Il lui est venu des boutons au visage.
- (17) Il se fit un grand silence.

- (18) Il s'élève des difficultés.
- (19) Il en sortait des étincelles.
- (20) Il en est sorti une fumée.
- (21) Il lui est échappé une parole imprudente.
- (22) Il s'est passé alors quelque chose de bizarre.
- (23) Il s'est produit un petit accident.

[残存]

- (24) Il ne reste donc plus, en français moderne, que des flexions de nombre et de genre.
(TABLEAU, p. 162)
- (25) (...) il reste deux formes pourvues de flexion: *nous aimons, vous aimez*.
(MEILLET, p. 177)
- (26) Il subsiste pourtant un grand fait, et où la linguistique est intéressée.
(MEILLET, p. 332)
- (27) De toute ma compagnie, il ne restait debout que six hommes et moi.
(L'ENLEVEMENT, p. 477)
- (28) (...) il subsiste toujours dans le système nouveau une portion notable du système ancien, (...)
(MEILLET, p. 85)

[経過・流布]

- (29) Il s'écoula plusieurs heures.
- (30) Il ne se passe pas de jour qu'il ne me téléphone.
- (31) Il court d'étranges nouvelles.
- (32) Il s'est raconté beaucoup de choses.

[前後関係]

- (33) Il s'ensuit plusieurs conséquences.
- (34) Il n'est rien sorti de nos recherches.
- (35) Il entre de la colère dans sa décision.

[出現]

- (36) Il apparaît de temps en temps sur la surface de la terre des hommes rares.
- (37) Il va paraître une nouvelle édition de cet ouvrage.

[生誕]

- (38) Il lui est né une fille.
- (39) Il naît plus d'enfants chez les pauvres que chez les riches.

[欠如]

- (40) Il manque beaucoup de choses.
- (41) Il manque une chose pour réaliser ce projet: c'est le fonds.

[死亡]

(42) Il meurt, année moyenne, deux mille personnes dans cette ville.

以上の例では一応意味によって分類を試みたが、いずれも存在に関与した文であることは、すぐ見てとれる。(1)～(5)等を「Sが存在している」と表現すれば(9)～(23)等は「Sが存在に至る」ということになるかもしれない。しかし *Il arrive un accident. / Il y a un accident.* のそれぞれについて「事故が起る。」「事故がある。」と両様に訳し得るように、そこに明確な一線が引かれているわけではない。肝腎なのはこれらの文でSの存在に焦点が当たっていることである。

興味深いのは(40)(41) *Il manque...* (42) *Il meurt...* で、これらは、いわば空集合の存在とでも言えようか。次のような表現間の連想が働いていることも十分考えられる。

Il y a : Il manque = Il naît : Il meurt

Il manque の場合、不定のSのみでなく、特定された形のSがくることが多い。これは「欠けている」と言うからには、その成員全体の存在は特定されていることが多いわけで、それによって限定を受けているためではないかと思われる。もし何が欠けているかがすでにわかっているれば、この文は何の意味ももたないわけであるから、その意味の特定と考えるわけにはいかない。

又、*Il reste* の場合も、定、不定の制限がないのであるが、これも同じ理屈で、ある成員全体の存在が特定された後、何が残っているか述べるため限定された形になるらしい。事実、このような文では、成員全体が何かが示されていることが多いようだ。

[不特定の例]

(43) *Il manque encore six francs.*

(44) *Il manque beaucoup de choses.*

(45) *Il manque un élève: sa place est vide.*

[特定の例]

(46) *Tout le monde est là? — Il manque Pierre.*

(8.5)
(46)は朝倉による)

(tout le monde は成員全体の表示、特定—Pierre が現われている。)

[不特定の例]

(47) *Il nous reste encore deux heures.*

(48) *Des orateurs, il reste peu de chose.*

(TABLEAU, p. 238)

(49) —le français, où il ne reste rien de la notion d'aspect, et où le temps est rendu avec tout un luxe de nuances. (MEILLET, p. 186)

(50) Il ne reste donc plus, en français moderne, que des flexions de nombre et de genre. (TABLEAU, p. 162)

[特定の例]

(51) De toute ma compagnie, il ne restait debout que six hommes et moi.

(L'ENLEVEMENT, p. 477)

(toute ma compagnie は成員全体の表示, よって moi が表われ得る。)

(52) Il reste ce dernier problème.

(一つしか残っていない (dernier) なら全体の表示がなくても無論特定。)

(53) Il reste vous au milieu de ces trois folles. — Il reste moi.

(ces trois folles は成員全体の表示, よって特定 vous, moi)

(52 53は朝倉による)⁽⁹⁾

また、これと全く同様の原理にもとづくと思われるのが、Il n'y a que, Il n'y a plus que における特定のSの出現である。この場合、ne...que (何々しかない) のであるから一つ (あるいは一まとめのもの) である。一つしか残っていないのなら (52) と同じで、そのことによって限定されてしまう。

(54) Il n'y a que les enfants à la maison.

(55) Il n'y avait plus que nous deux dans le parc.

したがって、Il manque ~, Il reste ~ に特定のSが出て、その特定の意味は違い、存在文における L + V + S (不特定) の原則を破っているわけではないのである。

非人称構文を取るためには、動詞に存在のあるいは存在に至る意味がなければならないことを確認しておこう。

(56) a. Il est venu beaucoup de monde.

b. *Il est allé beaucoup de monde.

(57) a. Il arrive deux garçons.

b. *Il part deux garçons.

(58) a. Il passe quelques soldats.

b. *Il disparaît quelques soldats.

その他、消失、消滅の意味の動詞は不可能である。

*Il s'éteint *Il se détruit

成長、向上に関したものも別に (→ 存在) ではないので不可能である。

*Il croît *Il embellit *Il rajeunit

また存在の動作に関するものも非人称構文にならない。

*Il marche *Il court (走るという意味で) *Il nage

英語でも There is ~ の他に There + V で存在を表わす形式があるが、これも仏語と類似の現象を示す。

(59) a. There *began* a riot.

b. *There *ended* a riot.

(60) a. There *rose* a green monster from the lagoon.

b. *There *sank* a green monster into the lagoon.

(61) a. There *ran* a man from the building.

b. *There *ran* a man around the track.

(59~61)は今井⁽¹⁰⁾による)

ここで興味深いのは (61) の例であろう。すなわち同じ動詞が文脈によって存在に至る意味をもつと可能になり、その意味がないと使えないことである。逆に言うともともとその中心的な意味が特に存在を表わすものでない動詞でも存在の意味をもちうる文脈では存在文構文に現われうると言うべきであろう。

(62) a. *Il court Pierre.

b. Il court d'étranges nouvelles.

又、朝倉氏は次のようなあまり一般的でない例を挙げている⁽¹¹⁾。

(63) On ne saurait guère plus dire s'il continue à pleuvoir ou s'il brûle un soleil
de feu. (LE CLEZIO, DELUGE, 46)

朝倉氏の言う通り、「存在を修辭的に表現する限りにおいて、非人称構文が可能」なのであろう。
Il pleure dans mon cœur. と雨でないものを降らせたように、作家の感性は、文法を最大限豊かに用いるであろうから、丹念にさがせば、まだまだめずらしい例を見つけられるのではないかと思う。しかしここでの問題は存在文の構造がそのような存在の意味を発揮させることが出来るという文法的な事実の方にある。

II. (ii)

さて、上記の非人称構文が Il y a 文と共通した構造をもつらしいことは分ったがなお残る疑問が二点ほどある。

①やはりこれらの文は S + V が倒置したものではないか？

②Il y a の場合は、場所辞のコピー y を有していたが、これらの文にはないがどうしてか。

①の疑問は次のような交代が可能であることにとづく。

(1) a. Un accident étrange leur est arrivé.

b. Il leur est arrivé un accident étrange.

(2) a. Une idée m'est venue.

b. Il m'est venu une idée.

(3) a. Une fumée en est sortie.

b. Il en est sorti une fumée.

(4) a. Un grand silence se fit.

b. Il se fit un grand silence.

(5) a. Plusieurs personnes sont venues.

b. Il est venu plusieurs personnes.

(6) a. Des invités arrivent.

b. Il arrive des invités.

(1) ~ (6) の a. の述部は恒常的状态を表わしているのではないから、不定冠詞の主語が可能で、

(7) *Un livre est la table.

のように非文にならない。しかし(6)を定冠詞にかえてみよう。

(8) a. Les invités arrivent.

b. *Il arrive les invités.

(6)(8)は朝倉による⁽¹²⁾

(8) b. は非文になってしまう。前節の非人称構文の例でもそうであるように S は基本的に不特定名詞に限るという制限があるのである。

この現象は

(9) a. Ce livre est sur la table.

b. *Il y a ce livre sur la table.

(9)a. を (9)b. に変換出来ない現象と平行している。したがって前節非人称構文の一群を独自の構造 V + S をもつものと考えてよい理由があるのである。

英語において非常に似かよった存在・生起を表わす There 文があるが、これらも又、不特定の S を用いるという制限があるのは偶然ではあるまい。

(10) There entered a shabby-looking old man.

(11) There happened a strange event.

(12) There lies a great city on the river.

(13) There once lived a man who thought he could fly.

(14) There stood a table in the center of the room.

(10~14)は「英文法用例辞典」⁽¹³⁾による。

②の Il y a のように y がこれらの非人称文にはないという疑問に対してはこのように考えられる。

まず L の存在は疑いえないところである。次の文では場所辞が実際に現われている。

(15) Il entre de la colère dans sa décision.

L

(16) Il lui est né une fille.

(17) Il en sortait des étincelles.

(18) Il se trouve deux solutions à ce problème.

現われない場合にも、動詞の存在・生起の意味、さらに義務的な不定の名詞によって L が言語的又、非言語的な文脈の中にあることは十分認めることが出来る。(Il y a 構文でも L が示されないものも多い。) そもそものような意味の文では何らかの L がなければ何の意味もない。

さてそうならばなぜ y が付加されないのかという形式的な問題が残るが、ここは逆になぜ Il y a ~ に y があるのか考えてみてもよいだろう。

Il y a の文語体に Il est ~ があることから分るように、Il y a は、本来 Il est と同じものである。Dauzat⁽¹⁴⁾によれば、最初は avoir のみが単独で使用された。

(19) Plus fel de lui n'out en sa compagnie. (CHANSON DE ROLAND)

しかし次にこれらを明確化するために y をそえた、とある。(さらに動詞を提示するために Il を用いて最終的に今日の Il y a という一種の決まり文句となった。)⁽¹⁴⁾

ということは、avoir という動詞が y をそえてはじめて自動詞並みになるということであろう。

y avoir = être

もっとも形の上では、avoir はどう見ても他動詞である。非人称構文において、S が直接目的語に近い性質を持つことが朝倉氏によって (Brunot⁽¹⁵⁾をふまえて) 指摘されている⁽¹⁶⁾が、筆者はこれを、やはり非人称構文が存在文であって、Il y a ~ と共通の源をもっていることのあらわれではないかと考えるがどうであろうか。

(20) a. J'attends des invités.

b. Je n'attends pas d'invités.

(21) a. Il arrive des invités.

b. Il n'arrive pas d'invités.

(20(21)は朝倉⁽¹⁶⁾による)

- (22) a. Il y a des invités.
 b. Il n'y a pas d'invités.

((20)~(22) の b. において de が現われることに注意)

そうでなければ、非人称構文の V が自動詞であることと、S が目的語的であることとの矛盾が説明出来ない。

III.

ここで、存在文の *raison d'être* を考えてみたい。前節まででは、V + S という構造は認められても、なお L の位置については特に証明したわけでない。しかしながら次節 IV. も含めて L + V + S という語順を設定しておくことは、自然であるという言明しておこう。

久野氏は存在文がなぜ L + V + S の語順をもつのかという問題に対し、「不定な事物の存在を表わす際、その存在する場所が普通すでに知られている特定な場所である。⁽¹⁸⁾」と述べ、「特定な場所(古い情報)+不定な事物(新しい情報)⁽¹⁸⁾」という旧から新へという談話の原則から説明している。

談話の原則についてはすでに久野「談話の文法⁽¹⁹⁾」、雑誌「言語⁽²⁰⁾」(1981 Vol. 10 No. 2)等にくわしく記してあるのでポイントのみにとどめる。

一般的に言語は「旧情報」について「新情報」を述べるという形を取る。旧情報(すなわち既知のこと)ばかり相手に話しても何の意味もないし、「新情報」ばかり述べるということもあり得ない。電報のような話し方を続けることは不可能である。言語は時間の軸にそって展開される線状的性格のために、おのずから旧か新を先に言われなければならないが、言語的文脈の中に新情報を配置するには、相手の理解している旧情報から新情報へという順が最適である。たとえばおとぎ話の冒頭は典型的な例であろう。

- (1) 昔々、おじいさんとおばあさんがおりました。

旧 新

- (2) おじいさんは、山へ柴かりに、

旧 新

おばあさんは、川へ洗たくに行きました。

旧 新

フランス語もその厳密な構造の中に、旧から新、軽から重への表現手段を様々な形で有している。ある会話を取りあげよう。

二人の男が旅行の話をしている。

- (3) A: (...) Et votre femme, est-ce qu'elle aime voyager par avion?
 (4) B: Non, elle dit qu'elle est maintenant d'âge mûr, et qu'elle préfère voyager en voiture.
 (5) A: Oui, dans une bonne auto rapide et confortable il est possible de faire de longs voyages sans se fatiguer.

((3)(4)(5)は 'Linguaphone' ⁽²¹⁾ による)

この対話のいくつかの部分を取り上げてみよう。

旧 新

votre femme

① aime voyager par avion?

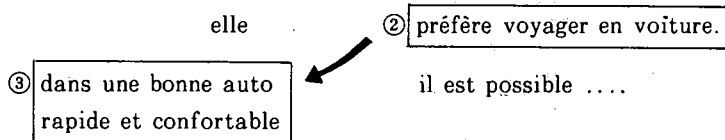
dit que ...

est maintenant d'âge mûr,

elle

elle

elle



votre femme は elle に代わったあと、主節及び従属節の先頭に来る。つまり文の大きい単位でも、埋めこまれた小さい単位でも旧情報であるから最初に来る。又、大事なことは、①②/③の位置で、①は aime voyager par avion が新情報だから文末にあり、②は en voiture が新情報だから (par avionではないので)、やはり文末にあり、③は前文の voyager en voiture をふまえた上で、une bonne auto...と言っているの、旧情報の位置に来るのが自然である。

このような旧から新へ、情報として軽いものから重要なものへという原則は統辞上の大きい単位から小さい単位まで非常に強く働いている。

又、仏語は、統辞上の単位の相互関係をきわめて厳密に述べる言語であるようだが、その代名詞の用法を見ると、旧情報であることを示すのにその形のみならず、位置によってもそれを表現している。

(6) a. Je donne une poupée à Marie.

b. Je *la* donne à Marie.

c. Je la *lui* donne.

(7) a. Combien de frères avez-vous?

b. J'*en* ai deux.

(8) a. Êtes-vous riche?

b. Oui, je *le* suis.

(9) a. Tu vas à Paris?

b. Oui, j'*y* vais.

すなわち (6) b. c. 等において旧情報を表わす代名詞は、文頭へむかって移動する。

こうしてみると、旧→新の原則が存在文の形にも適用されていると仮定してよいはずである。

先ほど述べたように、存在文の L はたいいて旧情報である。なぜなら、その旧の L に S が「在る」ことを述べる文だからである。S の方は新情報でここに焦点があてられねばならない。Il y a において、場所辞コピーである y は旧情報の位置を占め、S は新情報の位置にあるのは偶然ではないだろう。

ところで仏語のように格変化を失なった言語が L + V + S を表層の構文の一つとしてそのまま広く許容することは、他の文で首尾一貫している S + V + (他の要素) という原則にそむくことになり、これは一言話の体系の維持にとってゆゆしき問題である。かくて出て来る策が、Il + (y) + V + S という表現上の要求と、文法上の要求を同時に満たす形式だと思われる。

この形は、旧→新という語順に出来るということの他に、次の重要な利点を持っている。つまり「在る」ということは状態であって静的なものである。フランス語の動調は、名詞とは違って、末だにその活用語尾をもっている。ということは、名詞と動詞はその一致によって結びつきが強いのである。ところが Il + (y) + V + S 構文では、何といたっても Il が主語なのであるから、もはや、その結びつきをある程度断ってしまう。

(10) Pierre *marche*. / Nous *marchons*.

(11) Il y *a* un livre. / Il y *a* des livres.

(12) Il arrive un accident. / Il arrive beaucoup d'accidents.

したがって動詞の「動き」に関する意味は弱まって、というより、「動き」そのものが、一つの状態になってしまうのである。このことはフランス語の一特質とよく合致してはいないだろうか。

フランス語がたとえば動的な (dynamique) ドイツ語と比べて、静的 (statique) な言語であることは、C. Bally, W. von Wartburg 等によっても指摘されている。

“Le français est donc bien, dans son attitude en face de la réalité, à l’opposé de l’allemand: bien loin de chercher le devenir dans les choses, il présente les événements comme des substances.” (BALLY) ⁽²²⁾

“Cette tendance à exprimer les événements et les actions par des subst. plutôt que par des verbes” (WARTBURG)

と述べ、両者は共に Legrand の *Stylistique française* からの引用を挙げている。

(13) a. Ils cédèrent parce qu’on leur promit formellement qu’il ne seraient pas punis.



b. Ils cédèrent à une promesse formelle d’impunité.

さらにまた、Wartburg の挙げる Zola からの引用には、この存在文を用いた恰好の例がある。

(14) Sur les deux trottoirs, c’était une hâte de pas, des bras ballants, une hâte sans fin. *Il y eut une panique folle, un galop de bétail mitraillé, une fuite éperdue dans la boue.* (強調筆者)

ここでは動きはすっかり名詞の中に吸収されてしまっている。

IV.

フランス語には、Il y a ~ や他の非人称構文と違って、主語から始まらないために（つまり Il がないために）、これこそ「倒置」(inversion) と思われるものがあるが、このうち自動詞（および自動詞化した代名動詞）に関するものは、やはり存在文的な特質を示す。

(1) Derrière le château se trouve une tour.

これは一般向きのフランス語入門書からとった例であるが、「場所・時間などの副詞（句）が文頭にきた場合、自動詞・代名動詞（特に主語が長いとき）は倒置されることが多い。」という説明が付してある ⁽²⁴⁾。確かにその通りなのであるが、何故そうなるのかは書いてない。この種のタイプの文についての伝統的文法家の記述も、原理が示されていないためにあいまいな印象を受ける。

“Le verbe est parfois mis en vedette, avant le sujet, pour des raisons de style:”

(LE BON USAGE, GREVISSE) ⁽²⁵⁾

“(…) l’inversion du sujet, est certainement due ici au besoin d’équilibrer la phrase, au désir de lui donner un “dérroulement” aisé et harmonieux.”

(SYNTAXE, LE BIDOIS) ⁽²⁶⁾

“Après un complément indirect l’inversion peut avoir lieu si aucune équivoque n’est possible. Elle sera toute indiquée par le rythme pour éviter que le verbe, placé après le sujet, ne tombe court en fin de phrase;”

(GENIE, DAUZAT) ⁽²⁷⁾

(1) の倒置は実は存在文の基本的な語順 L + V + S がそのまま現われたものと考えてはどうだろうか。

- (1) Derrière le château se trouve une tour.

L V S

- (2) Il y a une tour derrière le château.

(L)V S L

以下、このタイプの倒置文を列挙する。L, V, Sの各要素は次のような特徴をもつ。

L: 場所, 場所的なもの, 旧情報

V: 自動詞, 自動詞と同じ働きをする代名動詞, 存在に関する意味を含む

S: 新情報としての存在者, 存在物, 不特定なもの^(27.5)

[存在]

- (3) Au-dessus de la porte, où seraient les orgues, se tient un jubé pour les hommes, avec un escalier tournant qui retentit sous les sabots.

(BOVARY, p. 356)

- (4) Voilà ce que je me demandais lorsque mes yeux furent soudain frappés: aux deux oreilles de ma femme pendaient des perles.

(IMPUDIQUE, p. 102)

- (5) Aux angles, se dressait l'eau-de-vie dans des carafes.

(BOVARY, p. 316)

- (6) ; autour des dirigeants se fixa, dans la Gaule septentrionale, une population germanique qui au nord et au nord-est garda sa langue (...)

(TABLEAU, p. 10)

- (7) En ancien français et en français moderne se sont développés de nouveaux temps composés de deux types:

(TABLEAU, p. 146)

[関係・継起]

- (8) A cette valeur de sol(i) dus, se rattache le sens de "solde, prix payé pour un service";

(MEILLET, p. 295)

- (9) De soudée, vient un français *soudoyer*, tandis que *soudard* est dérivé du v. fr. *soude*.

(MEILLET, p. 295)

- (10) Au maquis brûlé succédaient plusieurs champs en culture, enclos, selon l'usage du pays, de murs en pierres sèches à hauteur d'appui.

(COLOMBA, p. 855)

- (11) A ce roi bienveillant succéda un tyran terrible.

- (12) A ce cas s'opposent ceux des "étoiles" et de la "lune" dont le nom est toujours de genre animé.

(MEILLET, p. 221)

- (13) De cette connaissance dépend non seulement la gloire, mais la vie du matador.

(TAURAUX, p. 22)

[発生・開始]

- (14) De cet exemple ressort clairement une difficulté fondamentale de la grammaire comparée:

(MEILLET, p. 43)

(15) Ici commence la Bonne Nouvelle qui parle de Jésus-Christ, le Fils de Dieu.
(MARC 1-1)

(16) Au bas de la côte, après le pont, commence une chaussée plantée de jeunes trembles,
qui vous mène en droite ligne jusqu'aux premières maisons du pays.
(BOVARY, p. 355)

(17) Ici commence la difficulté.

以上一応の分類をしたが、構造は L + V + S、意味は、「存在」であることは、いずれの文にも共通している。L、V、Sの諸特性は、先に述べた通りで、これは非人称構文の時ときわめて似かよっている。これらの文においてはVは、通常焦点のある文末の位置をはなれたために、やはり動的な意味より静的な意味合いが強い。

この種の倒置文が類似の文脈で Il y a 構文、非人称文と平行的に現われている例を見ておこう。

C'était sous le hangar de la charretterie que la table était dressée. Il y avait
(18)a.
dessus quatre aloyaux, six fricassés de poulets, du veau à la casserole, trois gigots,
et, au milieu, un joli cochon de lait rôti, flanqué de quatre andouilles à l'oseille.
Aux angles, se dressait l'eau-de-vie dans des carafes.
(18)b.

(BOVARY, p. 355)

この部分の英訳をもあわせて見ると、さらにその平行性が確認される。

The wedding-feast had been laid in the cart-shed. On the table were four sirloins,
(19)a.
six dishes of hashed chicken, some stewed veal, three legs of mutton, and in the middle
a nice roast sucking-pig flanked by four pork sausages with sorrel. Flasks of brandy
(19)b. (28)
stood at the corners.

(18)a. は Il y a を用い (18)b. は倒置文を用いている。(19)a. では先に倒置文が出て、恐らくは、重ねて倒置を用いるのを避けて (19)b. となっている。(stand は物が立っている、立ててある、あるいは置かれている (be set, placed) 意で、ここでは全く静的な意味である。cf. A big apple tree stands in front of the house. A bench stood in the shade of an apple tree (29). つまり There is ~ とさほどかわりはない。)

さらにまた次の例：

(...) Presque tous ceux qui montaient la chaloupe furent noyés. Une douzaine
seulement put regagner le vaisseau. De ce nombre étaient Tamango et Ayché. Quand
(20)a.
le soleil se coucha, ils virent disparaître le canot derrière l'horizon, mais ce qu'il
devient, on l'ignore.

Pourquoi fatiguerais-je le lecteur par la description dégoûtante des tortures de la
faim ? Vingt personnes environ sur un espace étroit, tantôt ballottées par une mer
orageuse, tantôt brûlées par un soleil ardent, se disputent tous les jours les faibles

restes de leurs provisions. Chaque morceau de biscuit coûte un combat, et le faible meurt, non parce que le fort le tue, mais parce qu'il le laisse mourir. Au bout de quelques jours, il ne resta plus de vivant à bord du brick *L'Espérance* que Tamango et Ayché. (20) b. (TAMANGO, p.497)

(20)a. の Tamango et Ayché は主人公であるから、その意味においては最初から知られているわけだが、助かった人間 (une douzaine) の中に入っていたことにおいては新情報である。したがって De ce nombre を旧 (une douzaine) に近づけ、Tamango et Ayché を新情報の位置に配置すればバランスがよい。作者が次節で Pourquoi fatiguerais-je le lecteur... というそぐように、ここで前景に押し出された Tamango と Ayché の存在の効果がうすれないうちにもう一度 (20)b. の同類の構文へひきつがれていく。

旧情報から新情報へという一般的な談話の原則にそっているために、これらの倒置文は調和がとれ、かつ頻繁に出るものではないためか、ある種の新鮮な印象がある。

注

- (1) 久野暉「日本文法研究」(大修館) 1973, p. 265. 以下「日本文法」と略記。
- (2) 「日本文法」p. 34.
- (3) 泉邦寿「フランス語を考える20章」(白水社) 1983, p. 207.
- (4) S. Kuno: The Structure of the Japanese Language, 1973, p. 351. 以下 "the Structure" と略記。
- (5) 「日本文法」第30章「存在文の語順 (その二)」および Chapter 28, 'The Position of Locatives in Existential Sentences' in "the Structure"
- (6) 「日本文法」p. 291.
- (7) ibid. p. 291.
- (8) Il y a ~ も非人称構文であるが、以下便宜上、Il y a ~ 及び Il faut ~, Il est deux heures. Il fait chaud. 等を省いて非人称構文と呼ぶことにする。
- (8.5) 「ノート」p.262.
- (9) 朝倉季男「フランス文法ノート」(白水社) 1981, p. 262. 以下「ノート」と略記。
- (10) 今井邦彦「変形文法のはなし」(大修館) p. 279.
- (11) 「ノート」p. 457.
- (12) 「ノート」p. 259.
- (13) 「英文法用例辞典」(研究社) 1984, p. 652.
- (14) A. Dauzat: Le Génie de la Langue Française, (Librairie Guénégaud), Paris, 1977, p. 284. 以下 'Génie' と略記。
- (15) F. Brunot: La Pensée et la Langue, (Masson et C^{ie}), Paris, 1965, p. 289.
- (16) 「ノート」p.260.
- (17) 「ノート」p.260.
- (18) 「日本文法」p. 291.
- (19) 久野暉「談話の文法」(大修館) 1978.
- (20) 「言語」(1981 Vol. 10 No. 2) (大修館)
- (21) 'Linguaphone (Cours de français)', (Linguaphone Institute), p. 146.
- (22) C. Bally: Linguistique Générale et Linguistique Française (Francke Verlag), Bern, 1965, p. 356.
- (23) W. von Wartburg: Evolution et Structure de la Langue Française. (Francke Verlag), Bern, 1946, p. 265.
- (24) 鈴木豊「フランス語の基礎」(研数書院), 1973, p. 174.
- (25) M. Grevisse: Le Bon Usage, (Duculot), Paris, 1980, p. 183.

- (26) G. Le Bidois & R. Le Bidois: *Syntaxe du Français Moderne*, (A. et J. Picard), Paris, 1971, p. 25.
- (27) "Génie", p. 236.
- (27.5) ここで一見特定に見えるSが現われているが、これらは文脈指示による特定ではない。(5)の l'eau-de-vie は dans des carafes による限定である。(8) le sens もそれ以下の de+名詞句によるもの。(12) ceux は対立によるもので Il y a~ でも、この限定は現われうる。
- Il y a les gens qui exagèrent et ceux qui sont raisonnables. (B. ポティエ「一般言語学」三宅・南館訳 p. 113 による。原著 P.Pottier: *Linguistique Générale*, (Klincksieck), Paris, 1974.)
- (13) la gloire, la vie は抽象名詞, du matador による限定でもある。(15) la Bonne Nouvelle は唯一のもの。(17) 抽象名詞。
- (28) G. Flaubert: *Madame Bovary* (Translated by Alan Russelle), (Penguin Books), p. 41.
- (29) Shogakukan Random House English-Japanese Dictionary, 'stand' の項。

文例引用書目

文例は次の著作による。本稿中においては書名、あるいは作者名の一部を略記した。

- TAMANGO/ P. Mérimée: *Tamango*, (PLEIADE), 1978.
- ENLEVEMENT/ P. Mérimée: *L'Enlèvement de la Redoute*, (PLEIADE), 1978.
- COLOMBA/ P. Mérimée: *Colomba*, (PLEIADE), 1978.
- BOVARY/ G. Flaubert: *Madame Bovary*, (PLEIADE), 1951.
- MEILLET/ A. Meillet: *Linguistique Historique et Linguistique Générale*, Paris, Champion, 1982.
- TABLEAU/ A. Dauzat: *Tableau de la Langue Française*, Paris, Payot, 1967.
- IMPUDIQUE/ J. Tanizaki (traduit par G. Renondeau): *La Confession Impudique (Kagi)*, Paris, Gallimard, 1963.
- TAUREAUX/ P. Mérimée: *Les Combats de Taureaux*, (Edition annotée par Shin-ichi Ichikawa), Daisan-shobô, 1984.

(昭和59年9月27日受理)

(昭和59年12月20日発行)

